

授業におけるICT利用の深さと透明度*)

—学校と地域を元気にする ICT—

篠原文陽児
(東京学芸大学)

筆者は、「マイペンライ」で古くから知られ、今では、数日前の無観客サッカー試合も、その「知名度」に一役買ったタイ国バンコク市にある、ユネスコ・アジア太平洋地域教育局で2年間の任務を終え、昨年(2004年)8月31日に帰国した。

2年間の業務内容は、「ICTによる教師教育事業計画」の推進であり、この計画は、日本政府が2002年5月から3ヶ年計画で、ユネスコに創設している「ICT信託基金」によって開始された。10のプロジェクトがある。

アジア太平洋地域では、「ICT」といえば、今や「Pedagogy-Technology Integration」が、大きな話題であり課題である。日本語では、「教授学と技術の統合」とでも訳せようか。2004年度CD-ROM版「ブリタニカ百科事典」によれば、Pedagogyとは「教育目標と教育目的が達成される方法である教育方法学に関する研究」とある。「フレーベルの教授学」「ヘルバルトの教授学」と言ったりすることからもうなずける。つまり、「教授学と技術の統合」とは、ひらたくいえば、「授業の中で、ICTを利用」していこうということである。これは、ICTの統合つまりICTを使う「深さ」あるいは、ICTの授業の中での「透明度」にしたがって、4つの段階を想定している(図参照)。してみると、「統合」というよりは「融合」といったほうが適切かもしれない。ともあれ、「教授学とICTの融合」の第一段階は、ICTに触れ慣れて、日常の授業でICTを意識的に使ってみるという「初期段階(Emerging)」。運動会たけなわの今日この頃、「ホップ・ステップ・ジャンプ」のホップの段階、いや「助走の段階」か。次いで、その利用にやや深みと透明度が増す「応用段階(Applying)」、「ホップの段階」。この段階では、教師がICTの使い方を意欲的に学び、それまでの教育方法を自ら磨いていこうとする教師像が見える。第三段階は「ステップの段階」。授業でICTをどのような方法で使うかに加え、いつ使うかを考える教師。児童生徒の学習により目を向け、一人ひとりの学習の成立を容易にしようとする教師の姿を思い浮かべることのできる「促進段階(Infusing)」。そして、最後が、授業でICTを使う「深み」の度がもっとも強く、ICTが授業に「融け」こみ「透明度」が高く、ICTが見えなくなる第四の段階「発展段階(Transforming)」。 「ジャンプの段階」。このもっとも高水準のICT利用段階では、教師は、授業におけるICT利用の専門家として、授業中にICTを使いこなし、革新的な学習環境を創造する教師として、子どもとともに、成長する。

第四段階の事例としては、例えば、2003年1月にスリランカに出かけた折、授業でのICT利用について、筆者が次のような活動を提案したことを思い出す。目標は、学校に来ることと校庭に出て豊かな自然を観ることは、ともに楽しくて、学校と児童自身が学校を取り巻く地域社会の中心的存在として生きていることを、ICTの利用を通じて、実感することである(写真参照)。つまり、

「(1) 数台のデジタルカメラを購入し異なった学校に配布して、子どもたちを校庭や学校

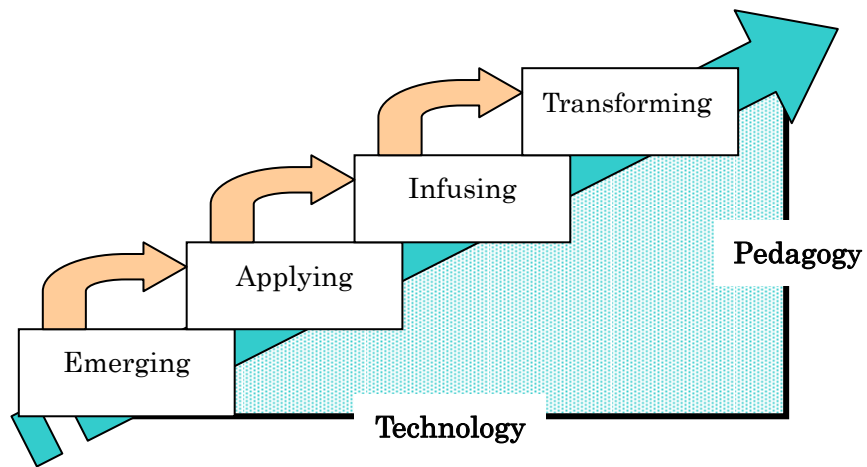
の外に放り出し、デジタルカメラを自由に使わせる。子どもたちが、あなた方教師と、どんなに楽しく創造的に、豊かな自然や地域の人々を、活動を、撮影し、ともに支えあって教えあって、自分の興味関心に応じて撮影してきた画像をデザインレイアウトして表現し、ホームページの制作に取り組むか、見たらよい。第4段階は、実はプログラミングの段階であり、ホームページをhtml等言語によって論理的に、それでいて感性豊かに発信することは、興味・関心が刺激された児童であれば、教師の手を借りずとも、できるに違いない。そして、(2) ICTを媒介に、自分の子どもの通う学校が、地域社会の重要な一つの組織とみなされるような活動こそ、推進されるべきである」と。

こうした地に足の着いたスリランカのプロジェクトは、本ICT事業計画の中の他の9つとの違いを際立たせている。教授と学習の意欲をそそり教授及び学習の内容と方法を革新的にしている。スリランカでは、十分な教材教具の無い学校と、学校に来ても水も飲まずに教室内でじっと座り続けなければならない子どもたちが多く、教師もアジア太平洋地域の他の多くの国々の教師と同様、十分な教師教育と教員研修を受ける機会に恵まれていない結果、教師としての自信を失いつつあり元気がなくなっているからである。

わが国のICTに関する教育利用に目を転じれば、1984年3月、社会教育審議会教育放送分科会(当時)が中間報告として公表した「マイクロコンピュータ教育利用研修カリキュラムの標準案(中間報告)」が、その最初である。その翌年には、同じく「教育におけるマイクロコンピュータの利用について(報告)」が、取りまとめられ、この第4章で示された教育におけるマイクロコンピュータに関する研修は、「初級」「中級」「上級」の三段階である。この標準案は、メディア環境が急速に変化する中で、1992年3月、「視聴覚教育メディア研修カリキュラムの標準」として改訂され、現在でも、教員研修の企画・実施に利用されている。

わが国では、ICT普及の兆し当初から、視聴覚教育メディアの一つとしてICTを位置づける施策を展開しているのである。このことは、今日、アジア太平洋地域のホットな課題の一つである「教授学と技術の統合」の基盤として重要である。しかし、現在の「標準」は作成されてからすでに10年以上が経過し、2003年3月、文部科学省委託事業による『「視聴覚教育メディア研修カリキュラムの標準」の改正に向けた調査研究」報告書が刊行されている。

そして、ようやく、2006年3月、「標準」の「改正」版が刊行された。



図「教授学と技術の統合」展開モデル



写真 自然いっぱいの学習環境で技術を活かす

*¹) 財団法人日本視聴覚教育協会編「視聴覚教育」平成 17 年 6 月号掲載の記事に、筆者が手を加えた（平成 18 年 6 月）。